LA NOUVELLE

N°.4
PRINTEMPS

東京外語仏友会
〒113-0033 東京都文京区本郷 2-14-10
本郷サテライト 東京外語会気付
発行責任者　神奈川孝子（昭 37）
2010.3.25 発行

ハイチ巨大地震がフランス語圏諸国、なかでもアフリカに与えた深い衝撃

谷口　侑（すすむ）（昭 34）
国際フランス語プレス連合（UPF）国際委員

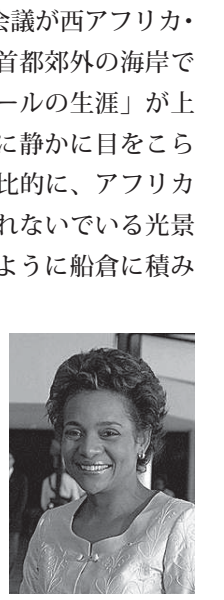
2010 年の年頭、わたしは、ことしフランス語圏諸国メディアにとってアフリカが話題になるだろう、と予測した。それは、「アフリカの年」と呼ばれた 1960 年、アフリカで 17 カ国ーうち実に 15 カ国がフランス語圏諸国（旧ベルギー領を含む）ーが相次いで独立してからちょうど 50 年が経ったからである。わたしが外語大を卒業して新聞社に就職して間もなくで、こうした新興独立国について学ぶためには、フランス語は「第三世界の共通言語」として極めて重要だった。それらの国は半世紀後の今日なお安定した民主国家からほど遠い状況で、この機会に、現状分析や歴史の再検討が行われると期待した。

ところが 1 月 12 日、巨大地震がカリブ海のフランス語圏国で“最貧国”のレッテルを貼られている島国ハイチを直撃し、死者30万人を超す大災害となった。毎年のようにハリケーンに襲われ、960 万の人口を養うだけの農業も工業もなく、所得格差と汚職の蔓延、政情不安、社会不安に苦しみ、国連が派遣している平和維持軍によってやっと治安が保たれている国。そんな国を襲った自然災害のあまりのむごさに世界は驚愕した。「神はなぜ、かくもハイチを憎むのか」（米誌ニューズウィーク）とのため息が漏れる。

ハイチは、かつてコロンブスによって発見され、“カリブの真珠”と呼ばれて西欧列強が植民地争奪戦をくり広げた要衝サン・ドマング島の西半分である。仏奴隷商人がアフリカ大陸から送り込んで農園で酷使した黒人奴隷たちの末裔だが、仏大革命の当初奴隷制廃止が宣言されたことに勢いを得て彼らは武器を手に立ち上がった。しかし強欲のナポレオンは奴隷制復活に踏み切り、反乱を鎮圧しようと 4 万の大軍をハイチに派遣したが、黒人たちは果敢に抵抗し、ついに自力で 1804 年独立を獲得し「世界初の黒人共和国」となったのだ。なかでもトゥサン・ルーベルチュール（1746 ー 1803）は仏軍に捕えられ、仏本土に移送されて幽閉され、獄死する。わたしの記憶に鮮明に残っているのは、仏大革命 200 周年にあたる 1989 年 5 月、第三回フランス語圏首脳会議が西アフリカ・セネガルの首都ダカールで開催された時、首都郊外の海岸で首脳たちを前に「トゥサン・ルーベルチュールの生涯」が上演された時のことである。黒人俳優の熱演に静かに目をこらしているミッテラン仏大統領（当時）と対比的に、アフリカの首脳たちはこみ上げてくる感情を抑え切れないでいる光景だ。この海岸から、黒人奴隷たちは家畜のように船倉に積み込まれ、送り出されたのだ。

トゥサン・ルーベルチュール（ハイチ紙幣の肖像の一部分）

今度の大災害に際して、ハイチ出身の黒人人口を多数抱える米国のニューヨーク、フランス語の通じる利便さからハイチ移民が流入するカナダ・ケベック州などのハイチ出身者がハイチの惨状に心を痛めている様子が次々と伝わってくる。現カナダ総督ミカエル・ジャンは、ハイチ生まれ、ケベック育ちの人気女性 TV キャスター出身である。彼女はテレビの画面を通じて、涙ながらにカナダ国民にハイチ救援を呼びかけた。しかし、先進国のハイチ支援より先に、アフリカ諸国首脳から支援金拠出の申し出が相次いだ。それぞれ国内に政治的・社会的不安を抱えているセネガル、コンゴ民主共和国、カメルーンなどが巨額の支援金を申し出たのだ。なかでもウァド・セネガル大統領は「アフリカの大地に、ハイチの被災者を引き取るべきだ」と提唱している。フランス語でネット上を飛び交うメッセージ：「世界初の黒人共和国ハイチはアフリカの長女なのだ」「世界の黒人よ、今こそ立ち上がれ。ハイチの同胞を救おう！」コンゴ出身でルノドー賞を獲得した作家アラン・ムバンクは言う ー「ハイチを襲った大地震は、実はアフリカの心臓部を直撃した。しかし、わたしたちがアフリカでこの身体も、魂も失おうとも、ハイチには常にわたしたちの“アフリカらしさ”が残る！」


カナダ総督
ミカエル・ジャン

その一方、仏本土では、文豪アレクサンドル・デュマ（1802 ー 1870）を主人公にした映画『もう一人のデュマ』が 2 月 10 日封切になり、話題を呼んでいる。『三銃士』『モンテクリスト伯』などで世界的に知られるデュマだが、父親デュマ将軍の母親はハイチの黒人女奴隷であり、従って彼には黒人の血が四分の一流れている。浅黒い肌、分厚い唇，縮れた髪の毛からして、混血だと悪し様に言われた。映画は、多作だったデュマの陰には、せっせと彼の代筆をする“黒子”がいた、という風説をもとにしたものだが、主役のデュマを演じたのが正真正銘の白人である性格俳優ジェラール・ドパルデューだったことから、「人種差別主義に基づく映画」との批判が有色人種サイドから一斉に吹き出して論争になっている。予想しなかった“アフリカ論争”であり、私は興味を持って行方を見守っている。

デュマの肖像
エティエンヌ・カルジャ画

（写真はいずれもウィキペディアより転載しました）

秋のサロン仏友会報告

藤倉洋一（昭 45）

2009 年 11 月 21 日（土）、恒例のサロン仏友会が、本郷サテライトで開催された。当日は晴天で、ボジョレ・ヌーヴォの前評判がよかったこともあり、飛び入り参加も加わり、参加者が 60 名を越す大盛況となった。

2 時過ぎに始まった第 1 部の講演会は、鈴木光子氏（昭 36）による「言語から見たスイス事情」であった。神奈川会長（昭 37）の挨拶と講師紹介に続いて、鈴木氏は都合 23 年間勤務したスイス政府観光局での経験をベースに、スイスの専門家としてその豊かな知識を惜しげなく披露された。

講師　鈴木光子氏

氏は 17 年前に外語会で講演を行なわれたことがある。今回はその後培われた膨大な経験をベースに、スライドをも交えて、分かりやすく、スイスで話されている言語から観察される諸事情について説明していただいた。

九州ほどの面積を持つスイスは人口 750 万人。うち五分の一は移民などの外国人だが、スイス人が話しているのは、ドイツ語（70％）、フランス語（22.5％）、イタリア語（7％）、ロマンシュ語（0.5％）の 4 言語である。これを、連邦、カントン（州）、個人のそれぞれのレベルでどのように扱われているか興味深い話が続いた。

連邦ベースでは、憲法で国語や公用語が規定されていること、国会では議員は自分の母語で話してよく、同時通訳が付いていること、その割にはカントンに比べて国の権限は小さく、通貨・外交・軍隊・郵便、水力発電などに限定されていることなど知らないことが多い。全国紙も全国放送もない。文部省もなく、教育マターはカントンで決められる。

車のプレートの「CH」はラテン語「Confoederatio Helvetica」（＝スイス連邦）の略で、硬貨や切手のように 4 ヶ国語を併記する余裕がない場合は、ラテン語「Helvetia」（＝スイス）が使われており、これは、古代ローマの支配前から今のスイス周辺に住んでいたケルト系先住民の部族名ヘルウェティイ族に由来するという。これにちなんだ「Helvetica」というフォント（ローマ字書体）があるというのは新鮮な驚きであった。そのすっきりした、スイスを連想させる書体は、日本では JR 東日本の駅名のローマ字などに使用されていて、随分親しまれているらしい。

カントンレベルで意外だったのは、26 あるカントンのうち、ジュラ州（ジュネーブのあるフランス語圏）が、ドイツ語圏のベルン州から独立してできたカントンで、ジュネーブなどと同じく、今でも大まじめに独立国家樹立を主張する人々がいることだ。

スイスドイツ語は 70％もの人々に話されてはいるが、話し言葉のみで、標準ドイツ語とは似て非なるものらしく、すこぶる「汚く」聞こえる言語だという。その点、フランス語は一部数字の言い方が異なる程度で、それでもフランス人から見るとしゃべり方はのろいらしい。3 万 5 千人しか話していないロマンシュ語は、スイス先住ケルト族の土着の言語で、ラテン語しいてはイタリア語に近いため、かつてムッソリーニがイタリアに編入しようとしたが、その前に国民投票でスイスの国語に決めてしまったという逸話は微笑ましい。

小さな国に 4 つもの言語があると、様々な問題が生じる。日本語表記にするときの難しさは容易に想像できる。スイス人同士でも英語で話したほうが通じやすいときがあるという。また、いわゆるスイス文学というものはなく、フランス語で書かれるとフランス文学になってしまう。スイスではノーベル文学賞は一人しか輩出していないそうだ。

以上は講演のごく一部だが、鈴木氏から頂戴した盛りだくさんの情報・知識に触れることで、スイスのことをあまり知らない参加者にはその多様性を、スイスをよく知っている参加者には、スイスの小さいながらもその奥深さを再認識させることができたと思われる。講演前と講演後ではスイスのイメージが大きく変わったのではないだろうか。充実した楽しい講演であった。

講師を囲んで盛り上がる懇親会

講演会場の 3 階から会場を 8 階に移して、3 時半すぎから、第 2 部のワイン・パーティが始まった。幹事の和賀千恵子（昭 45）さんの軽妙な司会で、前仏友会会長の渡辺昌俊さん（昭 32）が乾杯の音頭をとった。前評判では、50 年来とか 10 年来とかの枕詞の付く出来具合と言われたボジョレ・ヌーヴォの栓が次々にあけられ、会場の雰囲気は例年以上に大いに盛り上がった。

Pain surprise（デコレーション付きサンドイッチ）や Mont d'or（フランス北東部、フランシュ＝コンテ地域圏ドゥー県のスイス国境近くのジュラ山脈で作られる季節限定のウォッシュタイプチーズ）、各種手作りのおつまみは飛ぶようになくなった。参加者から発せられる「美味しい！」の一言が、準備を重ねてきた幹事を安心させた。ワインのあまりの売れ行きに例年以上のボトルを開けることになった。

Doudou（ドゥドゥ）の役割

ー東京外語会パリ支部だよりNo.2

高橋真美（平 3）

パリ支部のメンバーのなかには、子育てをしながら暮らし、仕事をしている人もいます。今回は、フランスの子育てに欠かせないDoudou（ドゥドゥ）の話題を、同窓生の近況を交えながらお伝えします。

Doudouというのは、ぬいぐるみや毛布など乳幼児が愛着を持つもののことです。子ども自身が選び、これがあると落ち着くそうです。特に、添い寝の習慣がないフランスでは、乳幼児から単独で寝るため、多くの子どもがDoudouを抱いたり、なめたりしながら眠りにつきます。

高橋真美さん

2009年は丑年。息子のDoudouは、牛の一家のぬいぐるみです。これは、沼田睦子さん（昭44、パリ支部の幹事）が息子の誕生祝いに贈ってくださったものです。息子は、毎晩、パパ牛のしっぽをなめ、飽きるとママ牛、そして子牛をかかえて寝ています。添い寝を必要とせず、牛たちが一緒なので1人で寝るのも寂しくないようです。

また、Doudouは、家と外をつなぐ重要なものだと考えられています。フランス語で、objet transitionnelと言われ、「移行対象」と訳されるようです。これは、イギリスの小児科医であり精神分析家であるドナルド・ウィニコット（Donald・Winnicott）が考えた概念で、フランスではDoudouの定義のひとつとなっています。

中谷麻理さん（平14）は、娘さんが7か月の時から保育園に預けているのですが、Doudouの重要性について、保育園の小児科医から説明があったそうです。家を離れる時、不安を逃れるために子どもが拠り所にする大切なDoudou。当時決まったものがなかったため、母親の香りがするTシャツを持参するように助言を受けました。現在も、娘さんがお昼寝をするときは、このTシャツを手にしているそうです。中谷さんは、卒業後、パリ第一大学で政治学を学び、その時に知り合ったフランス人と結婚しました。現在は、育児に専念しています。

中谷麻理さん

会議通訳の延増（えんぞう）崇子さん（平4。その後、博士前期課程修了）は、学部時代の留学中に知り合ったフランス人と結婚し、4人のお子さんを育てています。友人たちから贈られたぬいぐるみが、子どもたちのDoudouになり、兄弟姉妹の間を渡り歩いているものもあるそうです。2002年にフランスに居を移してから、延増さんは、ヨーロッパ各地の会議を担当するようになり、泊りがけの出張が多くなりました。ご自分のハンカチに香りをつけて置いていくこともあるそうです。これも一種のDoudouであり、子どもたちは、これを持って寝たり、枕の下に置いたりして、安心感を得ているようです。

延増崇子さん

単なるぬいぐるみと笑ってすませることはできないDoudou。これがなくならないようにアラームをつけ、なくしてしまったDoudouを捜索する会社もあるほどです。多くのフランス人が幼少期を懐かしむ思い出の品。息子のそれが、大学の先輩からの贈り物だということを語り伝える日を心待ちにしています。

2010年10月フランスツアー

―秋色の南仏からTGVで話題のシャトーへ ―

第14回目となる恒例の東京外語会海外親善ツアーは、今年10月中旬にワインと歴史、風光明媚で知られる南仏を訪問する予定で計画を進めています。また東京外語会パリ支部会員の皆様との交歓会を、同窓の坂口功一さん（F44）が経営されているパリ近郊のホテル「**シャトー・デ・クロ**」（LA NOUVELLE No.2参照）で開催する予定です。行程全般は下記内容で検討中です。
皆様のご参加をお待ち致します。

日程　平成22年（2010年）10月21日－28日
旅程　成田⇒ニース⇒モナコ⇒アルル⇒リヨン⇒パリ⇒成田
　（リヨン～パリ間はTGVを利用）
見込費用　お一人様当たり約29万円（含航空運賃、宿泊、食事＊、観光、送迎費等）
　（注）1：＊食事は朝6回、昼3回、夕なし、機内食
　2：燃料サーチャージ、空港利用税、交歓会費、行程に含まれない食事代、その他個人利用に帰するもの等は別途となります
募集人員　30名まで（最少催行人員20名）
利用予定航空会社　エールフランス航空

旅行社：ユーラシア旅行社
詳細案内および募集開始　東京外語会会報119号（2010年6月1日発行）に掲載します
問合わせ先
神奈川孝子（F37）mt-kana@mx6.mesh.ne.jp
渡邊　悦男（F44）user603944@aol.com

仏友会総会のお知らせ

日時：2010年4月24日（土）
午後2時　総会
2時30分～3時45分　講演会
3時45分～5時　懇親会

会場：大手町サンケイプラザ（東京メトロ大手町出口E1直結）
（201, 202号室）
会費：5,000円
（当日通信費2010年度分（1000円）も申し受けます。）

講師：波多野宏之氏（昭44）（駿河台大学副学長、元国立西洋美術館主任研究官）
演題：「情報メディアの伝統と革新 - フランスの図書館・美術館に学んで」（仮題）

講師プロフィール：F44年卒。武蔵野美術大学、東京都立中央図書館、国立西洋美術館等を経て現在、駿河台大学副学長。

1984-85年　仏政府給費留学（ポンピドー・センター）
1995-96年　文部省在外研究（ルーヴル美術館内文化省中央図書館・アルシーヴ）。
専攻、アート・ドキュメンテーション、文化環境の日仏比較。元日仏会館評議員。
現在、日仏図書館情報学会会長。
著書に『画像ドキュメンテーションの世界』、『デジタル技術とミュージアム』（編著）、サロワ著『フランスの美術館・博物館』（共訳　文庫クセジュ）など。
登録会員は同封ハガキにて4月10日までにご返事下さい。
お問合せ先：藤倉洋一（昭45）fujikura1639919@waltz.ocn.ne.jp
神奈川孝子（昭37）mt-kana@mx6.mesh.ne.jp；
Tel/Fax (03)3313-4310

『ノートルダムの鐘』を観て

2009年度第87回外語祭フランス語劇

菅原恵美子（昭42）

第87回外語祭は09年11月19日から23日まで開催され、語劇は連日、朝から晩まで31回の公演が続いた。外語祭の詳細は外語会報118号を御覧頂くとして、フランス語劇は運悪くサロン仏友会の開催と重なったため応援の影は薄かったが、歌ありダンスありの劇を楽しませてもらった。開演前には長蛇の列ができ、幕が上がる頃には立見席が出るほどの盛況であった。これまで古典劇や現代劇に挑戦してきたフランス語専攻2年生の彼らが総動員で取り組んだのは「ノートルダムの鐘」。物語はノートルダムの塔に閉じ込められた醜い容貌のカジモドとジプシーの若い娘エスメラルダを中心に展開、舞台装置もシンプルながらもセンスがよく、おしゃれだった。女子学生が多いためかカジモドの敵役を女性が演じたり、独唱やコーラス、決闘など盛りだくさんの場面が展開し、一瞬タカラズカ歌劇を思わせるほど。ノートルダム寺院の3体の石像やジプシーたちのリーダーの道化師役の歌唱力が際立ち、よくここまで歌とフランス語と演技を作り上げたと感心もする。最後には会場からはブラボーという歓声も上がった。

今年11月の語劇は新装なったホールで上演されると思うと楽しみでもあり期待している。今年は大勢で観劇しましょう。

ブラボーにこたえる大団円

ANNONCE

笹川日仏財団

笹川日仏財団は1990年に設立されたフランスの公益法人で、日本とフランスの相互理解を深めるためのプロジェクトを企画、支援しています。フランスにおいては、日本の代表的な話芸である落語の上演を応援したり、禅の本格的理解のために臨済宗大徳寺派の僧侶をフランスに招聘したりしています。一方日本においては、月に一回程度、フランスのオペラや歌曲のレクチャーコンサートを催したり、地方分権など様々なジャンルの専門家をフランスから招き、講演会を開催しています。財団のイベント案内をご希望の方は、担当・伊藤t-ito@spf.or.jpまでお申し込み、ご登録ください。　伊藤明子（昭60）

ハイチ支援：チャリティサロン開催

去る1月31日、本郷サテライトにおいて「ハイチ支援チャリティサロン」を開催致しました。ハイチの元宗主国フランスでは地震直後から多くの音楽家達が立ち上がり、1月24日には大規模な支援コンサートがパリで行われました。この映像を急遽取り寄せ、ハイチ救済を願う歌手達の熱唱をお聴き頂きました。外語OBの方々にも大勢ご参加、ご協賛頂き、5万円を日本赤十字社を通してハイチに寄付させて頂きました。ご協力深く感謝申し上げます。サロンドシャンソンはほぼ毎月開催、詳細は下記HPをご覧下さい。　小幡君枝（昭52）
http://www.justmystage.com/home/npkimie